
ルーナの七夜

立間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーナの七夜

【Nコード】

N1644W

【作者名】

立間

【あらすじ】

十人の少女が戦い、最後に残った一人を守護乙女として選ぶ儀式「ルーナの七夜」。十人の少女たちが七夜をどのように戦い、もしくは生きていこうとするのか。

一夜目二ハル（前書き）

かくして、大いなる力は次のように得られるものである。

司祭たる二十人を定める。この二十人は同じ家から出ることはできない。

司祭は一月の間沐浴を行い、身を清める。いかなる穢れも入れてはならない。

そして捧げられるべき十人の処女を聖別する。十人に欠けるところがあつてはならない。聖別ののち、処女らには邪を入れてはならない。

一夜目一ハル

嫌な夢を見た。ハルは目を覚ますと、まず一番に顔をべたべたさわった。手になにもつかなかったので、やっと夢が夢だったことを確認して一息ついた。

しかしそれもつかの間だった。寝ている寝台がいつものものではなかった。手織りのシーツの代わりに、石造りのごつごつざらざらした感触の寝台に寝かされていた。

ハルは飛び起きて、あたりの様子をうかがった。壁に大きな穴が空いていた。群青にわずかに紅が混ざった、日の沈む間際の空の色が見えた。部屋の隅に、壊れた花器が転がっていた。そして何の音もしなかった。自分の靴が床の砂を踏む音がやけに大きく聞こえた。

とうとうこの日が来たのだ。この九年というものは、この日の準備に過ぎなかった。

ルーナの七夜。七夜の間、十人の少女が最後の一人となるまで戦う。その最後の一人は、次代の守護乙女として限りのない力を得る。そういう儀式だ。

始まりは、日が沈んでからだ。七夜の始まりにはまだ少しの間がある。ハルは寝台のそばで軽い体操をした。緊張はなかった。すでに自分のすべきことは心に決めていた。

親友のアシナを守ることに。それがハルの行動指針だった。そのためだったらなんでもする。他人だろうと自分だろうと、殺すことにためらいはなかった。

寝ている間に着替えさせられたらしく、すでに戦衣装を身につけていることに気がついた。足にぴったりとした皮靴、一族の守護紋章が刺繍されたマント、動きやすい上着とズボン。

「あ」

思い出して、あわてて上着の下を探った。革紐のついた赤い石

はきちんと首に下がっていた。石を服の外に出そうとしたが、思い直してやめた。この石は大事なものだ。しまっておいた方がいい。

寝台の横を見ると、いつも使っている槍が転がしてあった。ちゃんと持ってきてもらえたらいい。槍と言っても堅い木を身長とおなじくらいの長さに切り出して、先端を尖らせただけだ。単なる棒として扱われてもしかたないくらい粗末なものだが、魔力をこめれば鎧の十枚も難なく突き通す。馴染んだ木のすべすべとした手触りを確かめ、自分の傍らに立てる。それで身支度は終わった。壁の穴から空を眺めながら、ハルは夜が来るのを待った。

最後の光が山の向こうへ消えていった後、闇が一気に濃くなった。それがあまり急だったことにハルは驚いた。槍を引き寄せても一度空を見ると、半月があかあかと空に上っていた。

ハルはそろそろ外に出た。月あかりのため、数間先まで見る事ができた。しかし静かさは相変わらずだった。自分の靴が砂を踏む音しか聞こえなかった。ハルはこの荒れ果てた町に一人ぼっちのような気がした。

(まずは……)

アシナを探そう、とハルは決めた。儀式の舞台となっているこの廃都は広い。そしてそのどこに誰がいるのかは何も知らされない。最悪なのは、再会までにアシナが誰かに殺されてしまうことだ。それだけは避けなければいけない。それに、二人で協力すれば戦いを有利に進められるだろう。アシナも自分を探してくれているはずだ。道に並んで建つ石造りの家々はそのほとんどが壊れていた。中には基礎組みしか残っていないようなものもある。道にも石がごろごろと転がっていたり、大きな穴が空いていたりした。足元に注意しながら、ハルは歩を進めた。急に冷たくなってきた空気のように、ハルの感覚も澄んでいた。

その感覚が、背後にかすかな気配を感じた時、考えるより先に身体が動いた。ハルは建物の角にまわりこむと、壁を駆け上がって屋根の上に出た。そして気配のした方へ向かって駆けた。逃げる足

音をハルは聞いた。足音を追って、ハルは屋根と屋根の間を飛んだ。追いかけてっことは長く続いた。ハルも逃げる人間も声は一言も発しなかった。しかし、逃げる人間の足音はだんだんと大きくなってきた。息遣いも聞こえるようになった。ハルを振り切れずに焦る気配が伝わった。

その焦りが限界に達したとき、足音は急に止まった。ハルは気配目掛けて跳び、槍を振り下ろした。

がんと槍が弾かれ、ハルは地面に転んだ。飛び起きて槍を構え直す。

「ハルか」

気配の正体はデメットだった。細身の刀を正眼に構えている。ハルは何度かデメットの稽古を見たことがある。この刀の斬れ味は警戒すべきだった。

「躊躇ないみたいね」

デメットが言った。もちろんハルに躊躇など無かった。それはデメットも同じだろうと思った。デメットの構えは、守りではなく攻めのためのものだった。

この距離では魔術よりも手にした得物のほうが速い。ハルとデメットはじりじりと相手をうかがった。ちりちりと動く刀がきら、きらと月あかりをうつした。

ハルは中段に構えを移した。そして軽く突きを入れた。ひゅつ、とデメットは鋭く気合いを吐きながら身をかわした。そして伸びたハルの左腕へ刀を振り下ろした。

だがそれより、ハルが槍を引き戻し再度突きを放つほうが速かった。どっと手ごたえがして、刀が金属音を響かせて地面に落ちた。

「あつ」

抑えたような声をデメットが発した。そこへハルは蹴りをくれた。デメットはあおむけに地面に倒れた。

「聖霊よ来たれ、雷鳴を轟かせ」

術語を唱える。轟音とともに、槍に稲妻が落ちる。目を閉じてい

ても光が瞼の裏に届いた。

目を開けると、デメットの身体は焼け焦げていた。槍が支えを失って倒れるところを、ハルは片手で止めた。抜き取って二、三回先端を地面でたたく。

あたりの様子を伺ってから、誰かに見つかるのを防ぐため、ハルは走ってその場を離れた。

（あと七人）

走りながらハルは勘定した。自分とアシナを除いて、あと障害となるのは七人。長いようだが、今のようにつ一つ片づけていけばいい。そう考えながら、ハルは顔にかかる髪をはらった。

一夜目―イリト

すぐそばで響いた雷鳴を聞き、目の前で人が雷に焼かれるのを見て、イリトは思わずかぼそい悲鳴を上げた。すぐに気づき悲鳴を止め、自分の身体を物陰に隠した。しかし身体全体がぶるぶると震えるのを止められなかった。イリトは自分の腕を噛んだ。そして目を閉じた。顔を上げると、そこにハルがいるような気がした。怖くて目を開けられなかった。

（始まっちゃったんだ……）

イリトは今はルーナの七夜なのだと実感した。目の覚めた時もちろん怖かった。しかししばらく何の音も聞こえなかったのも、だんだんと緊張が薄れてきていた。

ハルとデメットの戦いを見てしまったことで、さっきまでのちょっとした心の平安など一文菓子のようにちやちなものだと思い知らされた。イリトは声を立てずに泣いた。そして心の中でリュギを呼んだ。

イリトはもともとルーナの七夜に出たくはなかった。守護乙女になるのが至高の荣誉と聞かされても、自分とは関係のない話だとは思えなかった。守護乙女候補を集める学院、バリートールルーナに入ったのも、金糸ぬい通りの着物とオウムを買ってもらえるという約束を取り付けてからだった。

着物もオウムもいらない、とイリトは心の中叫んだ。宝石も読本も横笛も。何もいらなから、家に帰りたいと願った。しかしくらは祈っても、この廃都市から誰かが自分を連れ出してくれる気配はなかった。

しまいに、イリトはそろそろと顔を上げた。そこにハルがいないのを見てとって、ほっと安堵の息をもらした。

稽古にそれほど熱心でなかったことも手伝って、イリトは優秀な戦士ではなかった。格闘術をならってもさんざん傷めつけられるだ

けで、技は大して身につかなかった。魔法も詠唱に時間がかかり、実戦では役に立たなかった。つまりが弱かった。自分でもその弱さをよく知っていた。

反対に、今見たハルはその強さをよく知られていた。その上話しあう隙もなかった。バリートⅡルーナでは少女同士の争いは禁じていたが、喋ることは禁じていなかった。いずれ戦うことになるかもしれないとわかってはいたが、だからといって今を一緒の場所で過ごしている人間を無視することはできなかった。ちよつとしたきっかけ、例えば食事の席が隣になったとか、与えられたハンカチが同じ色だったとかで、少女たちはたやすく友人をつくった。

イリトも、二三人の親しい友人をつくっていた。この友情はたいてい稽古でひどい成績を残した仲間意識からはじまった。しかし、その友人たちはイリトを残してみなバリートⅡルーナから去っていった。

イリトが後頼れるのは、リュギしかいなかった。リュギは他の友人とは違い、強かった。そして、学院に来る前からイリトとリュギはお互いを知っていた。

「リュギ……」

立ち上がって、イリトは名前を読んだ。自分でびっくりするくらいに弱々しい声だった。

月が上天にのぼってきていた。半月にも関わらず、さえざえと強い光を放っていた。白い砂や白い壁はその光を受けて足元を判然とさせた。

イリトはなるべく物陰を選んでそろそろと進んだ。戦いの跡の残る傍にはいたくなかった。どこにいくというあてもなかったが、止まっていると一人の孤独をがひしひしと感じてしまうのだった。

あたりの物音のいちいちに耳をそばだて、道を横切るのには時間をかけて気配をさぐってからのしたので、わずかの距離を進むにもひどく疲れた。頭が重かった。

そのとき、イリトは井戸を見つけた。道の先にちよつとした広

場があり、その隅につるべのついた井戸があった。

イリトは生唾を飲んだ。気づかないうちに喉がカラカラになっていた。

（暑くもないし、そんなに動いてもないのに）

緊張からくる喉の渴きを覚えたことのないイリトは、そう不思議に思った。しかし冷たい水を飲めば、この頭の重さや速い脈拍も落ち着くのではないかと思った。辺りから物音がしないことを十分確かめてから、イリトは井戸に寄っていった。つるべをほどき、桶を落とすと、ずっと下のほうでぱちゃんと水の音がした。

なるべく慎重に桶をひいたが、きるきるとつるべは音を立てた。いつでも逃げ出せるように、イリトはあちこち目を配りながら立て膝で桶をひいた。

やっと手に入れた水は、入れた手がびっくりするほど冷たかった。両手でくんだ水を、イリトは続けざまに飲んだ。凉水が喉を通って胃の腑まで、一筋の脈を作った。なぜだか目のはしに涙がにじんだ。

四杯目かの水を飲もうとしたとき、イリトの耳はかすかな音をとらえた。水をあたりにまき散らしながら、イリトは立ち上がって後ろを振り向いた。

「にゃあ」

白黒の子猫がいた。イリトはほーっと息をついた。そこに、例えばハルの姿を思い浮かべていたので、安堵はひとしおだった。

子猫はイリトからある程度の距離をとって、じっとこちらを見つめていた。なぜか逃げようとはしない。

「水？」

喉が渴いているのかと、イリトは手に水を汲みなおして子猫を呼んだ。はたして子猫はじりじりとこちらに近づいてきた。そして、ついにイリトの手から水を飲んだ。

子猫のざらざらとした舌が手のひらに当たってくすぐったかった。イリトはそのくすぐったさをがまんしながら、子猫が満足するのを

待った。

「にい」

お礼のつもりか、最後に小さく鳴くと、子猫はかるがると暗闇に消えていった。イリトは後に残された。あまり目立つところにはいさぎたことに気づき、桶をもとに戻して影に走りこんだ。飲んだ分がそのまま出てきているように、ぼたぼたと涙が落ちてきた。

一夜目　リュギ

一時の隠れ場所に、リュギは物見台の上を選んだ。使われている木はぼろぼろになっていて、足を踏み入れた時はぎしぎしと音が鳴った。

家の中より外から見られやすいが、逆にこちらからも周囲を見渡すことができる。その中でリュギは彫細工を作っていた。

彫細工といっても装飾品や芸術品のたぐいではない。魔術の術式を刻んでおき、いざ魔術を使うときにはそこに魔力を通す。通常の詠唱を使うのに比べ、発動にかかる時間を短くできる。術式札と呼ばれるものだ。

いつもは鉄でできた術式札を使うのだが、目覚めたときに手元にそれが見当たらなかった。袖なしの上着に肘覆い、布ベルト、髪留めは身に着けていたのだが、札と一緒に運ばれてこなかったのだろう。ただ、一応想定範囲内ではあった。

リュギは物見台の床の木を剥がし、これは手元にあった短剣でそれを刻んだ。鉄ならよいのだが、木だと魔術を発動したときに焦げてしまう。術式の一部でもが壊れるともうその札は使い物にならない。札はたくさん用意しておく必要があった。それに、この静けさはかりそめのものだ。いつ戦いが始まるかわからない。作れるときに作っておかなければいけない。

木を刻みながら、リュギはちよくちよく頭を上げて周囲の様子をさぐった。先ほど一度稲光が光った以外、明らかに戦いが起こっているというしるしはなかった。

（イリトは……）

まだ大丈夫だろうか、とリュギは思った。正直に言って、イリトがこの七夜に選ばれるとは思っていなかった。イリトは弱い。そのうち家へ帰されるだろうと考えていた。

イリトの生家であるビダール家は、国内で五指に入る富豪だった。

主に織物を扱う商人で、ほかに金貸しもしていた。

イリトの父母はイリトを溺愛していた。イリトが望むものはすぐに与えられた。

以前、イリトが海へ保養へ出かけたとき、海に浮かんだ小舟をほしがったことがあった。すぐに小舟がとりよせられたが、市中には船を浮かべる場所がない。小川はあるが船を浮かべられるほど深くはないし、一番近くの湖まで行くのには半日かかる。そこで、ビダル家の屋敷の邸内には池が掘られた。魚がはなたれ、専属の使用人が置かれ、水がわざわざ引かれた。

そういう話を知っているのは、リュギが昔からビダル家に入入りしていたからだ。リュギの父も商人だった。しかしイリトの父ほどには商才がなかった。彼はだんだんにその財産を減らした。それに補いをつけるために金を借りた。出所はビダル家だった。そしてそれを返すためにまた財産を削った。

なぜ父がビダル家に自分を伴っていくことにしたのか、リュギは知らなかった。おそらくは借金の申し込みか、返済の延期の交渉の話し合いの最中、広いビダル家の屋敷の中でリュギは放っておかれた。そこでリュギはイリトに出会った。

二人はそこ、七歳か八歳だった。まだ家の事情も何もわからなかった。二人は屋敷じゅうを走り回った。イリトの部屋の中で珍しいお菓子を食べ、象牙や彫刻をべたべたさわり、壁にかかった織物を体にまきつけてドレスに見立て、花をつんで頭に飾った。

やがてリュギの父はビダル家に向かわなくなった。そのころには、リュギも自分の家とイリトの家の間の隔たりがわかるようになっていた。あの池を作るだけの費用が自分の家にあったら、と思うようになった。家の中にはだんだん物が少なくなっていた。母の指を飾っていた緑色の石もなくなり、絵入りの水がめも消えた。

ときたまイリトに会った。イリトがやってきたのだ。

「なんでこのごろ来ないの？ 遊ぼうよ」

何も知らないような無邪気な顔をして、イリトはそう言った。リュ

ギは自分が引け目を感じていることに気付いた。そしてその引け目に自分で傷ついた。

やがて、リュギはバリートルルーナに入った。守護乙女となれば、数万の軍に圧倒する力を手に入れる。それは軍事的な力だけでなく、政治的な力ともなった。自分の家を引き上げることともたやすいだろう。それを表向きの理由として、リュギは家を離れた。

学院の中と外は完全に隔絶されている。そもそも守護乙女候補を学院へ入れるのは、外部からの干渉を防ぐという意味が大きい。他の候補の少女を暗殺する、ということが学院のできる前は頻繁に行われていた。それで、十二歳になった時、守護乙女候補の少女は学院に入れられる。バリートルルーナの門を再びまたぐのは、守護乙女候補を外れたときか、ルーナの七夜を迎えたときだ。

だから学院に入ったとき、イリトには再び会うことはないだろうと思っていた。そのイリトが二か月遅れで入ってきたとき、リュギは心底驚いた。

（そして、こうして今に至る）

リュギは短剣をつかいながら考えた。リュギには戦略はなかった。ただ戦おう、と思っていた。それがどういう結果になるにしろ。

しかしイリトがいるとなると、話は少し違ってくる。たとえばハルやデメットののように、自分以外はすべて敵と思いなせるのなら話は簡単だろうが、リュギはそういう性格ではなかった。戦いに対して恐怖はないが、人を殺すにはまだ躊躇があった。それが友人相手となればなおさらだった。

持ち運べるぶんだけの術式札を作り終わると、リュギは短剣を鞘に戻した。術式札は腰に下げた革袋に詰める。20枚ほどは作っただろう。ただそのうち足りなくなるだろうと思い、床板をはがしたものをベルトに挟んだ。

「終わったか」

急に下から呼ばれた。驚きをつとめて顔に出さないようにしながら、リュギは下をのぞいた。物見台を見上げるようにして、セレン

が立っていた。特徴的な赤い髪でそうわかった。

リュギは物見台から飛び降りた。着地しても、セレンは手を出してこようとはしなかった。

「いつからいたの？」

「君が十枚ほど術式札を作る間は、ここにいた」

「気付かなかった」実際、その間何度もあたりを探ったが、気配はしなかったのだ。

「隠れていたし、殺気も出さないようにつとめたからな。もう準備はいいのかい」

「まあ。でも、なぜわざわざ待っていたの」

聞いたが、その理由は何となくわかった。セレンはひたすら真面目な性格だった。不意打ちには彼女のやり方ではないのだろう。

「準備の整わない相手を後ろから——この場合は下か——襲って、それでは本当の戦いができないだろう。七夜はもつとも強いものを決める、神聖な儀式だ。卑怯な振る舞いはできない」

「なるほどね」

セレンは厄介な相手だった。正面から来られては駆け引きも何もない。

「では、準備も整ったようだし、やろう」

リュギは短剣を右手に抜き、左手に術式札を握った。セレンも徒手で構えた。

「カルトラ・ウィラ！」

リュギは術式札の一枚を放り、風を起こした。ごうっという音とともにセレンが後方へ吹き飛ぶ。しかしセレンは空中で何かを唱え、方向をこちらに変えた。

「力の場所は外にあり、その力を借りるは我」

セレンが詠唱している途中で、リュギはまた術式札を投げた。「カルトラ・スナイ！」

空から尖った氷がセレンへ向かって降りそそいだ。セレンが腕で自分の頭上を払う。そこへもう一枚、リュギは熱せられた石のつぶ

てを放った。セレンは接近戦に強い。あくまで距離をとり、術式札を使って相手に魔術を使う暇を与えず倒すつもりだった。

石の一個がセレンの肩に入った。セレンはよろめいた。しかし入りが浅い。「力の場所は外にあり、その力を借りるは我、我世の境今はなく、ここへ集まれよ世の力」

セレンは石をかわしきり、その詠唱を唱えきった。そしてまっすぐにこちらへ突っ込んでくる。セレンは術式札を放とうとして、革袋に手をつこんだ。しかしほしい札がすぐに手に当たらない。その一瞬で、セレンは距離をつめリュギの足を蹴り上げた。

「ぐっ」

左足の肉の奥が強く痛んだ。これまでの経験から、この痛みは骨の折れた痛みとわかった。うつぶせに倒れながら、リュギは必死に術式札を取り出した。しかし短縮した詠唱を唱える前に、今度は首を手刀で突かれた。

「が」

喉の奥から空気が押し出され、意識が飛びかけた。右手からナイフを奪われ、その刃が目の前できらめいた。死、が脳裏をよぎった。「土よ聞け、土へ力を、集まりて盛り上がれえっ」

セレンのではない詠唱の声が聞こえた。と、目の前のセレンが横殴りに飛ばされた。顔にぱらぱらと砂がかかった。

「大丈夫っ？」

ふわりと、リュギの隣に誰かが立った。目をやると、そこにはミラテナが立っていた。反射的に構えようとしたが、ミラテナはリュギの肩に軽く手を置いた。そしてセレンへ向かって、もう一度土を襲いかからせた。

セレンはこちらの様子をうかがっていたが、土をよけると北へ向かって逃げて行った。後姿はすぐに見えなくなった。それを見届けて、ミラテナはリュギにもう一度顔を向けた。にっこりと笑っている。

「あ、……した……」

先ほどセレンに喉を突かれたため、うまく声を出せなかった。しかしミラテナはこちらの言いたいことがわかるようで、「お礼はいわ」と言った。

「……んで……」

「なんでもないわ。前から……あなたなら信頼できると思っていたの」

「……らい……」

「そう。ね、私と組みましょう。どう？」

ミラテナはそう言った。ちょうど月にうすく雲がかかり、あたりがさっと暗くなった。

一夜目ーミラテナ

「そう。じゃ、ここは？」

「った、痛い！」

「ここね……ちょっと待って」

ミラテナは服のすそを裂き、長い布をつくった。それをリュギの左足、かかとより少し上のところへ巻いた。

光もほとんど差し込まない家の中にいるので、リュギの表情はかすかにしか見えなかった。しかし全身に力が入っているようすや、声を必死にこらえているようすはわかった。

「ありがとう……」

ミラテナが折れた左足の手当てを終えると、リュギは礼を言った。

「いいの。ほんとうは薬草か何かあればいいのだけど……」

「ううん、だいぶ楽になった」

リュギは上げていた左足をそろそろと床におろし、両足で立とうとした。しかしすぐ左足を床からはなし、腰を落としてしまった。

「歩けそう？」

「ちよつと……難しいみたい」

「ごめんね。もっと早く私が見つけていればよかったのに」

「いや、そんなこと。助けてもらってほんとによかった。それに、歩かずに飛べば大丈夫だし」

「そうね……」

「ミラテナも立ってないで、座って」

リュギは自分の座っている横を手で払った。この家は比較的壁や屋根が壊れておらず、家具もいくつか残っていた。リュギが座っているのは木で作ったテーブルである。ミラテナが腰を下ろすと、すこし軋んだものの問題なく体重を預けられた。

しばらく二人はそのまま座っていた。お互いが身じろぎする衣擦れの音が聞こえた。

「ねえ、どうしてわたしを助けたの」

沈黙を破ったのはリュギだった。ミラテナは用意していた言葉をそのまま口にした。

「さっきも言ったでしょう、あなたなら信頼できると思っていたの。そのあなたが戦っていたから、そして劣勢だったから」

リュギはしばらく黙っていた。

「でも……でも」

「でも？」

「わたしたちは敵でしょ。……最後に残れるのは一人なんだし」

「そうね」

「だったら、信頼とか協力とかは……」

「必要よ」

ミラテナは力強く言った。

「リュギ、あなたはイリトと仲がいいでしょう」

「え？ うん、まあ」

「イリトが心配じゃない？」

「それは、うん」

「イリトと戦おうと思う？」

「いや、それは……」

「思わないでしょう。でも、最後に残れるのは一人よ」

「でも」

「それと同じでいいでしょう」ミラテナはリュギの言葉を遮った。

「確かに敵、ということになっているわ。でも、ほんとうに戦うかどうか、決めるのは私自身でしょう。そうじゃない？」

「うん……」

「それに、これからどうなるかなんてわからないわ。たとえば明日に私が死ぬかもしれないし」

「そんな」

「ことない、ことはないわ。わからないのよ、誰にも。だからここは四の五の言わず、協力しましょうよ。そのほうが楽よ、きっと」

ミラテナはそう言って、リュギの両手を握った。リュギはあいまいにうなずいた。まだ納得しきれていないようすだった。

かまわない、とミラテナは思った。リュギにはもう恩を売りつけ終わった。根が善良もしくは単純なリュギには売られた恩を踏み倒すことはできないだろう。それにリュギは手負いだ。

となれば、リュギをどう使うかはこちらの胸先三寸だ。今のところは、リュギを使ってイリトを引き寄せ、適当なところを見て二人とも殺すつもりだった。イリトと正面から戦って負けるとは思わないが、逃げ一手の相手を仕留めるのはなかなか難しい。いつ邪魔者が現れるかもわからない。

イリトがすでに殺されているということも考えられる。その時は、リュギを使って楽をし、終わりの近くになったら始末する方針でいこうとミラテナは考えた。実際、先ほどの言葉ではないが、四の五の言わず協力したほうが楽なのだ。交互に見張りをして睡眠を貪ることもできる、敵にも有利に当たることができる。ミラテナは最後に残るのが自分であることを疑っていなかった。そしてそこにたどり着く道はより平坦にしようと思っていた。自分ならばそれができるという自負もあった。他人の命や心はミラテナに響かなかったし、嘘や甘言を口にすることが後ろめたいという発想もなかった。ミラテナは立ち上がり、扉から外をうかがった。ひと気はない。だが、外の空気がだんだん青みを帯びてきた。夜明け前の空気だった。

「リュギ、そろそろ朝みたい」

「ほんと？ よかった」

リュギは片足で壁伝いに歩き、こちらへ寄ってきた。空はほんどん明るさを増してくる。空の黒い部分は西へ追いやられ、黒が薄まり濃紺、青、とグラデーションに染まっていった。星がどんどん姿を消していく。

いよいよ東の空から太陽が顔を出す、という時になって、ミラテナとリュギは目の前が一瞬真っ暗になるのを感じた。目が見えるよ

うになると、外の様子は一変していた。

明るくなりかけていた東の空は、なぜか暗くなっていた。一転して西の空は薄く橙色が残り、そこに白い月が浮かんでいた。一番星も光っている。

「え？ ……え？」

リュギはきよろきよろとあたりを見回した。ミラテナはあたりを探った。しかし敵の気配はない。

一瞬にして、夜明け前が日没へと変わった。夜が終わり、一瞬でまた夜が来たのだ。

（ルーナの七夜）

教えられなかった、七夜という言葉の本当の意味をミラテナは初めて知った。

二夜目二ヤリズ（前書き）

四隅にはしるしをつけなければならない。しるしはそれと見分けるために、血によってされなければならない。

しるしは柁の枝によって書かれなければならない。一角とも消してはならない。

二夜目ーヤリズ

儀式の間は朝がこないということをヤリズは知らなかった。もしかしたら他の、たとえばミラテナとかユルネとかは知っていたのかもしれない。だがヤリズの記憶によれば、夜がひたすら続くことを教えられたことはなかった。

何の術を使っているのだろう、とヤリズは考えた。都市の内部全員の間を止めて、朝が来ていないように錯覚させたのかと考えた。本当に時を進めたのかとも考えたが、あれは相当に難しい術で、まだ実験段階のはずだ。一つの街をまるごと、しかも昼をすべて飛ばすことができるとは思えづらい。ヤリズは地面を石でひっかき、疑似術式を書いてみた。しばらく書き続けて、やはり時間を進めるという線は無理があると結論付けた。

やはり錯覚という線だろう、とヤリズは疑似術式を消しながら考えた。時を飛ばすには、魔神でもないかぎりひねり出すことの不可能な魔力が必要だ。そんなことができるなら、そもそも守護乙女を造り上げる必要などない。その魔力を使って戦争でもなんでもすればよいのだ。

昨夜は、といってもついさっきまで『昨夜』だったのだが、ヤリズは誰とも会わなかった。しかしヤリズには自分が勝ち残ろうという欲はなかった。生き残りたいという気持ちも薄い。学院での生活で、ヤリズは自分の戦闘能力の低さをよく知っていた。大がかりなたとえば治水のための術式の構造を調べたり、魔道具を組み立てたりすることは好きだし得意だった。魔術に関する本は他国のものまで取り寄せて読んでいる。だが、魔術の研究と魔術を使った戦闘とは全く種類の違うものなのだ。

ヤリズが愛しているのは、術式を一から組み立てる思考過程であり、組みあがった術式の美しさなのだった。戦闘は違う。戦闘中に思考などできない。すべてはその時その時の判断の積み重なりだ。

自分が儀式では勝ち残れない、とヤリズが悟ったのは、学院に入って二年目のことだった。走りながら術を唱え、思った通りに発動させるという訓練をしていた。何度挑戦してもうまくいかない。走りに気を取られると魔術が使えず、魔術を使おうとするとどうしても身体が止まる。うまくいったと思っても、術は口の中で唱えられただけで発動しない。これを何度も何度も繰り返し、何日目かであろうやく成し遂げた。一瞬は喜べたが、周りを見渡した時、周りの人間はこれを何の苦もなくやりのけていることに気付いたのだった。落胆はしなかった。むしろ、やっぱりという気持ちのほうが大きかった。自分がこれに向かないことは最初から分かっていたのだ、と。

それから、ヤリズはあきらめることを始めた。無意識のうちに、自分自身に言い聞かせた。『私に未来はないのだ』『私は儀式の中で死ぬのだ』と。

一年するころには、自分の気持ちも落ち着いていた。自分に将来はない、という考えはすっかりヤリズの中に根付いた。それでやけを起こすようなこともなかった。受け入れてしまえば、むしろ学院での生活はやりやすくなった。

目覚めた時も、ヤリズは平常心を保っていた。自分から討って出ることはせず、目覚めたときにいた家の中にずっとこもるつもりだった。いずれは誰かに見つけれられ、抵抗するにせよしないにせよ殺されるだろう。ずっと予期し続け、そして慣れきった結末だった。

できるならその誰かはアリーケならいい、とヤリズは考えていた。ヤリズの生家であるグラーチ家と、アリーケのヴァーリ家は曾祖父の代からの因縁があった。あちらの家ではグラーチ家を蛇蝎のように言っているらしく、アリーケもその薰陶を受けていた。学院の中で初めて会ったとき、それまで面識はなかったのにもかかわらず、アリーケはヤリズをまるで親の仇のようににらんだ。

ヤリズ自身は、家の因縁の話を聞くよりも新しい式を考えるほうが楽しかったので、特にアリーケに思うところはなかった。初対面

で睨まれた後は、あまりかかわらないようにしようと考えた。

しかしアリーケは、そんなヤリズの態度が気に食わないようだった。格闘の模擬戦ではかならずヤリズと組みたがったし、組めば徹底的に打ちのめそうとしてきた。ヴァーリ家は武官をつとめる家系で、アリーケも幼いころから訓練を受けて育ったらしく、ヤリズはいつも打ち倒された。

それで気が済むのかと思えば、アリーケは「ふざけるな！」とヤリズに怒鳴った。アリーケには、ヤリズがあまりに齒ごたえのなかったことが、実力の差なのではなくヤリズの手抜きによるものだと思えたらしい。そんなことはない、とヤリズは何度も言ったが、アリーケは聞く耳を持たなかった。

もしアリーケが今現れれば、また戦いを仕掛けてくるだろう。そして、やっと私の言葉が嘘ではなかったと知るだろう。アリーケの溜飲も下がるはずだ。どうせ死ぬなら、少しくらいいい効果のある死に方のほうがいいな、とヤリズは考えた。

ヤリズは石を取り、また地面に術式を書き始めた。先ほどの時間を飛ばす術式で、気になるところがあった。まだアリーケが現れる気配はない。どのみち死ぬのだから、好きなことをしてから死にたい。今ならまだ夕日の残光がある。最初の、空間を固定化するところの式を書きながら、ヤリズはその美しさを楽しんだ。

二夜目ーアリーケ

アリーケは疲れていた。昨晩はひとときも気の休まる時はなかった。神経が昂ぶり、かすかな風の音も聞き逃すことができなかった。愛用の長刀を傍らに置き、アリーケは崩れかけた家の壁にもたれた。身体の重さを一時預けると、それで安心したのか、眠気が次によってきた。

（いけない、寝ては）

アリーケは目を強いて見開いた。寝ている間に殺されるなどあつてはならないことだった。戦わずに死ぬのは、アリーケにとってひどく不名誉なことだった。ことに、仇のいる戦場においてそんなことをするのは許されない。

しかし疲れていた。稽古での疲れとは違う疲れだった。疲弊、と言ったほうが正しいかもしれない。単なる体力の問題ではなかった。心が休まらないことが問題だった。

しかし座っている間に、アリーケはうつらうつらとしはじめた。少しするとはっと正気に戻るのだが、やがて意識がとろとろと沈んでいった。手足が寒く、無意識のうちにアリーケは膝をかかえる格好をとっていた。

「アリーケ」

アリーケはいつの間にか自分の家にいた。家の庭、広く造った稽古場がある庭にいた。

「正心に構えろ。腰を引くな」

「はい」

「恐れてはいけない。戦士は恐れないものだ」

「はい」

目の前の男はアリーケの従兄だった。従兄は木剣を手にしていた。「まずは恐れを乗り越えることだ。剣をふるったり魔術を使ったりするのはその後だ」

「わかりました」

アリーケがそう言うのと、いきなり場所が変わった。今度はアリーケは食堂にいた。堅苦しい服を着せられて、おとなしく末席の椅子に座っていた。

「……ならばコシユのやつは……」

「それが直前で寝返って……」

「くそっ！」

中央にいた父が机を拳で叩いた。食堂に沈黙が満ちた。

「アリーケ」

沈黙を破ったのは父だった。めったにかけられることのない父の声に、アリーケは背筋を正した。

「こうなればお前しかない。一族の名誉を回復するのは」

父がまた机を叩いた。その音に驚いて、アリーケは目を覚ました。アリーケはあわててあたりを見回し、何の変化もないことに安心した。

一族の名誉。アリーケはその言葉を頭の中で繰り返した。長刀を腰に刷いて立ち上がり、外へ出た。

アリーケは街の中をそろそろと歩いた。水汲み場を見つけ、そこで水を飲んだ。冷たい水が胃に滑り落ち、夢のあと、まだどこかぼんやりとしていた頭がはつきりした。

同時に空腹を感じたが、アリーケは食べ物の代わりに水で腹を満たして立ち上がった。長刀を鞘から抜き、またおさめた。

ヤリズはどこにいろのだろうか、とアリーケは考えた。もう死んでいることはないだろうが、自分が見つけ出すまで生きているかはわからない。

あれは弱いから、きっとどこかの廃屋にでも隠れているはずだとアリーケは考えた。探し物は苦手だが、こちらから行くしかない。アリーケはとりあえず北に足を向けた。

家を一軒ずつ覗き込みながら歩いていると、アリーケは上空からびりびりするような圧力を感じた。後ろに飛び退く。さきほどまで

自分のいたところに光が降り、地面にいくつも穴をあけた。

アリーケは長刀を鞘から引き抜いた。「精霊よ、集まりて渦を巻け」と叫び、持続時間こそ短いが、あらゆる攻撃に効果的な防幕を張った。その選択は正しかった。再度光が、アリーケの頭上めがけて降ってきたからだ。しかし光は防幕に当たり、じゅうという音を立てて消えた。

アリーケは跳びあがり、屋根の上に乗った。上空に目を凝らし、攻撃の元を見極めようとした。アリーケの耳に、空気を裂いてものが落ちてくる音がした。

「風よ聞け、吹けよ吹け、渦を巻き、巻き上がれっ」

落ちてくるものに向かって、猛烈な勢いで竜巻が向かう。しかしその勢いにかかわらず、竜巻はふっとかき消されてしまった。

「精霊よ我が腕に宿りて」

唱えかけたが、間に合わなかった。アリーケは落ちてきたもの――尖った槍――を自分の筋力だけで薙ぎ払わなければならなかった。何とか成功したが、両腕はしびれ、身体のバランスが崩れて膝をついた。

「精霊よ、我が身体に宿りて、我が足に我が腕にゴラートの力を」
立ち上がりながらアリーケは唱えた。しびれていた両手両足に内側から力がみなぎった。

落ちてきた、尖った槍を携えたハルは屋根から飛び降りた。同時にアリーケの立っている屋根にみると亀裂が入り、崩れ落ちた。アリーケはすんでのところで屋根の破片を蹴って、崩壊から逃れた。
「土よ聞け、土へ力を、集まりて指すほうへ降り注げ」

ハルの姿を目で確認できていなかったが、アリーケは見当をつけた方向に土を降らせた。しかしそれがハルに命中した気配がなかった。着地して、アリーケは道の左右に目を走らせた。いない。

アリーケは上下左右に気を配りながら歩き出した。ハルの戦闘能力は高い。厄介な相手だ。だが、そういう相手と戦えるというめぐり合わせにこそ感謝すべきだ。アリーケはそう考えた。

アリーケは右耳にかすかな音をとらえた。同時に地を蹴った。道を右に曲がり、塀を飛び越える。ハルの身体があった。身体は反対方向を向いている。アリーケは長刀を抜いて、難いだ。

がっ、という音がした。ハルが振り向き、アリーケの長刀を右腕に受けたのだった。刀は骨で止まった。

アリーケは左腕を伸ばし、ハルの喉を掴もうとした。ハルは後ろに身体を反らしてそれをよけ、同時に右腕から長刀を抜き、アリーケめがけて投げつけた。

アリーケが刀をよける隙に、ハルは塀を越えて逃げた。足音が遠くに消えていく。追いかけようとしたが、長刀を拾う間にその時を逃し、アリーケはその場にしゃがみ込んだ。長刀の先端で帯を切つて、つくった布で刃についた血をぬぐった。ぬぐいながら、さきほどのハルの目を思い出していた。ハルは右腕の傷にまるでひるむ様子を見せなかった。恐れを乗り越えたというよりむしろ恐れそのものを忘れたようだった。逆に恐れにとらえられそうな自分の心を、アリーケは必死に叱咤した。

二夜目ーセレン

昔、守護乙女を描いた絵を見たことがあった。守護乙女は背を向けて砦の上に立っている。空は暁の色をしていた。守護乙女は手に赤い旗を掲げていて、それが大きくはためいていた。

そのは、セレンの心にずっと焼き付いていた。セレンは守護乙女を何か壮大で美しいものの化身と考えるようになった。バリートⅡルーナでのきつい稽古の数々も、自分の身をその美しいものに近づけるための修行と思えば意義を見出すことができた。守護乙女の美しさは強さと分かちがたく結びついているものなのだ、とセレンは考えていた。もっともセレンは話を難しくすることは嫌いだったので、感覚的に信じていたと言ったほうが適切だった。

なので、ミラテナに戦いを邪魔されたことにセレンは憤りを感じていた。まさに決着というところで割って入るのは、ずるい卑怯なやりかたに思えた。まして今はルーナの七夜の真っ最中だ。儀式を汚す、罰当たりなやりかただ。

セレンは物陰でじつとうずくまり、痛む脇腹に手をあてていた。ミラテナから受けた攻撃のせいだ。今すぐにでも再戦を仕掛け、自分の行いの非を認めさせたいと考えていたが、思ったよりダメージは大きかった。少し身体を動かすと脇腹に鈍痛が走る。その上身体も疲労していた。

(まだ二日目か)

七夜が始まってからずいぶん経ったように思うのに、実際はまだ二夜目だ。こうして闇の中に身をひたすようにして、暗がりの中にいるせいかもしれない。きちんと時間が経っている気がしないのだ。しかしセレンはこの状況を辛いと思いたくなかった。辛いと感じてしまうと、その分だけ自分が守護乙女となる可能性をすりへらしてしまうような気がしたのだ。

守護乙女は誰よりも、どんな時にも、たとえ卑怯者を相手にして

いたとしても、正しく強くなければならない。守護乙女となるには、そのように強くあらなければならない。それがセレンの信条だった。しかしセレンはなおもじっとしていた。呼吸を整えても手をあてても痛みはなかなか消えない。暗さの中では感覚が研ぎ澄まされ、その分痛みも増していた。意識して正しく息を吐いて吸いながら、セレンは意識を集中しようとつとめた。

とっ、とかるい音が聞こえた気がした。

セレンは音のほうにすべての意識を向けた。しばらく何の気配もしなかった。それでもセレンは緊張を解かなかった。ひどく長く経った気がした。

「だめか」

声がした。

「セレンかな？　そこにいるのは」

「そうだ」

「そんなに真面目に殺気を向けてこなくてもいいのに」

「ユルネ、話はいい。やる気はあるのか、ないのか」

「ない」

「ユルネ」

暗さの中で輪郭しかわからないが、そこにユルネの気配があった。セレンはユルネの姿を輪郭の上に思い描いた。いつもなんとなくへらへらとしていて、つかみどころのないユルネの姿だ。

「怒らなくっても。ねえ、セレン。私は少し、行きたい場所がある。通してもらえないかな」

「それはできない。私たちは戦わなくてはいけないんだ」

「……後ではだめなのかな」

「七夜の間に後はないだろう」

「ねえ、セレン。私はあなたがけっこう好きなんだ。だから、戦わなくっても」

「くどい！」

セレンは構えをとった。脇腹の痛みは続いていたが、無視するこ

とにした。

「やらないきゃいけないか」

「いくぞ」

ユルネは足を踏みかえた。覚悟を決めたようだった。それに満足し、セレンは口を開いた。

「精霊よ、我が身体に宿りて、強くあらしめよ」

ユルネはこちらへ向かってきた。速い。打ち合うつもりか、とセレンは腰を落とした。今の自分は身体に魔力を帯びさせ強化させている。正面からなら負けるとは思えなかった。

ユルネが間合いに入った。とらえた、と思った。セレンはためた右腕で突きを放った。

「えっ」

右腕は、何にもかすりもしなかった。バランスを崩し、セレンはたたらをふんだ。そしてその上、ユルネの気配が消えた。

「えっ」

セレンはあたりを見回した。どこにも気配がない。しかし、かわりにほんのかすかな、かすかすぎる足音が聞こえた。

セレンはその足音を追った。かすかな足音はセレン自身の立てる音でかき消される上、どんどんと遠ざかっていく。セレンは必死になって走った。息が切れ、肺が痛んだ。

遠くに、月光に照らされている道があった。その道をほんの小さな影が横断した。影はまた闇に消え、足音はもう聞こえなくなった。

「猫？」

影は、黒い猫のようだった。セレンにはそう見えた。

「あれは……」

セレンは立ち止まった。今の一連の出来事がうまく呑み込めていなかった。

そして、いきなりどん、と背中を押された気がした。

下腹から太もも、そして足までがだんだん濡れていく感触があった。セレンは混乱し、後ろを振り向こうとした。足がもつれ、セレ

ンは地面に転んだ。

「あんまり前ばかり見てるから」

聞き覚えのある声がした。ミラテナ、と声を出そうとしたが、口が回らなかった。

「もう一発」

また背中が押された。それと同時にセレンの意識は急に暗闇に塗りつぶされていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1644w/>

ルーナの七夜

2011年10月9日14時42分発行